

## 枠組みの検討に関連して第2部会(第1回)の報告

### 1 「まちづくり」という言葉について

いろんな意味、受け止め方があるが、そんなに拘る思いはない。

吹田市は人口や経済規模からしても、これから成熟期に入る。成熟的にコンパクトにまとめるものの、中身をどれだけ充実するのか。成熟化した時代のまちづくりを定義した上で、この言葉を使わないといけない。

新しく作るという意味ではなく、あるものをもう一度生き返らせる、いきいきさせるという活性化あるいは再生の中身を含む言葉があればよりの確である。

「まちづくり」というのは我々がやると強調した方が良い。

#### <第2部会としての方向付け>

「まちづくり」という言葉に強く反対される方は、この部会におられないと思う。

主体が吹田市民であることを考え、色々な主体が自主的に進めることが「まちづくり」であると定義して、成熟、再活性化というような意味付けがあれば、「まちづくり」で十分良いのではないか。吹田らしい市民が主体である「まちづくり」をきちんと定義していくことが求められる。

### 2 「非核平和都市宣言」と「健康づくり都市宣言」について

①は理念とか憲章的な、「非核都市宣言ありき」でスタートしても良い問題だと思う。健康づくり都市宣言もこれありきである。施策の大綱とか言う以前の問題だから、これはベースになる問題として、やっぱり別扱いしても良いと思う。

本当に戦争を体験された方の話を聞く機会が少なくなっている。吹田市はそのような話を小学生に聞かせる機会をどのくらい持っていたのか。非核平和をまちづくりの基幹に置くべきであるという捉え方をした方が良い。

非核平和を本当に強く訴えたいと思うのであれば、全然別の場所を考えないと難しい。ここでは①と②が最初の理念になっている。

### 3 「① すべての人がいきいき輝くまちづくり」と「② 市民自治が育む自立のまちづくり」について

市民自治をもって、その中でわれわれ吹田は非核を主張するという流れから、市民自治が先に出てくる方がスムーズである。多分政治的な意味合いで非核が大きく出されていると思う。非核を無視するわけではなく、非核に至る道筋が何故かということが書き込めたら良い。

市民自治を育みながら協働でまちづくりをすることが今後の中心になるのなら、①と②の順序を入れ替えた方がいいのでは。

戦前、戦中、戦後の生活を体験している人はこの中に何人いるか。私もたまたま特攻隊に行かされて、助かったから命が残っている。平和がなければ、人権も環境も何も無い。人間生きるためには、平和一番である。

①と②のすわりがすごく悪い。②からスタートすれば①がなくなるのではないかと思う。

そうすれば両方入れたら元（第2次総合計画）のままである。元のままの方が流れはいい。

<第2部会としての方向付け>

①と②の順序に関しては、かなりデリケートであり、第1部会との調整もあるので預かることにする。

#### 4 「① すべての人がいきいき輝くまちづくり」について

非核平和は政治問題ではない。やはり平和であってこそ、私たちの暮らしがある。

世代間の交流がないため、伝わらない。平和の問題は常に言っていかなければならないことである。次の次の世代の人たちに分かってもらわなければならないし、そのような場を作っていくことが、我々の仕事である。

①の「(1)非核、平和のまちづくり」に次世代の人に語り継ぐことが書いてあるが、実はそれが難しい。きちんと書く必要がある。

非核平和都市宣言は現在も有効だろうが、この文言が引き続き使えるかどうか検証しなければならない。平和憲法と書いているが、9条が改正された場合に平和憲法と呼んでいいのかどうか大きな議論になると思う。

#### 5 主語を「市民は」とすることについて

京都市では基本構想で、「わたしたち京都市民は」という主語で始め、市役所とのパートナーシップのもとに、基本構想を進めるのは実は市民という書き方をしたが、そのような発想の転換が必要かもしれない。

防犯も国際化も青少年育成も社会教育も市民できちんとできるという認識がある。

「吹田市民」というのを強調する、「われわれが作るのだ」という意識付けが一番大事だと思う。ただ、自分たちとして何をするのがほとんど分からないので、そのための色々なレベルづくりは必要だと思う。

今活動している40代、50代はとてもパワフルで、まちづくりのリーダーシップをとっていたが、次の30代、20代に引き継げるのか。学校教育、大学教育そのものが崩壊しそうな方向にある今、果たして次の10年20年で支える人材が育ってくるのかと危機感まで持っている。そこまで含んだ上で、市民の自治を打ち出すならば、それを補強していく仕組みを入れなければ、単に言葉だけで進むと中が空洞化する。

今の社会の仕組みから、育ってくる若い人材は明らかに受身的人間が作られるようになっている。ここをまちの力によって、変えていけるかどうか。市民自治を担う次世代づくりがまず最初に難しいと思う。

主語を変えると、施策の大綱の6つの分け方が本当に良いのか、そのようなものが全部変わる。

何が支えになり、改善する強い力になるかといえば、やはり地域コミュニティであることが指摘された。だからこそ市民が主体に計画を考え、まちづくりを考えてもらわなければならないことになる。そのような意味で、転換点として行政まかせではない市民主体の、ただしそれは吹田をよくするというだけではなく、日本をよくするというか、社会をよくするくらいの大い議題になった気がする。

<第2部会としての方向付け>

主語を市民という課題に関しては、少し検討してもらおうか持ち帰ることにする。